

笑顔のおばあちゃん

渡辺 明美

開業助産婦(長野県松本市)

今年のお正月、いただいた年賀状を手に思いました。愛らしい子供の写真は多いけれど、さすがに“うちのおばあちゃん(おじいちゃん)はとても可愛いから見て!”という写真はないなあ。そんなことを思ったのも、この1年間、高齢者の方々と接する機会が増えたからでしょう。

私が介護保険に関わるまで

私は勤務助産婦として働いていた病院を12年目で退職、出張専門の乳房マッサージ・相談事業で開業しました。そして市で行なっている新生児訪問や乳児健診、両親学級も手伝っていました。

ある時、高齢者の訪問の依頼が市の保健婦さんからあり、正直なところ少しためらってしまいました。その私を見て保健婦さんが一言。「助産婦さんは高齢者の訪問を嫌がるのよね」。この言葉が胸に突き刺さり、引き受けることにしました。

私が病院で働いていたのは、産科と婦人科の混合病棟でした。女性高齢者に関わることも多く、職場柄、生と死に常に向き合い、自分なりに考える機会にも恵まれていました。死の準備教育等に関心があったことも、この仕事を引き受けた理由でした。産婦人科以外の勤務経験がなかったので、訪問看護婦養生講習会を受けながら、高齢者の訪問活動を開始しました。そしてその後“介護保険の認定調査”という仕事を担当することとなりました。

訪問調査で感じたこと

訪問調査の中には斑(まだら)痴呆の方もいらっ

しやるので、調査の間だけではなく、ふだんの様子もご本人やご家族の方から話をしっかり聴いて公平な調査をめざしたいと思っていました。しかし話を聴けば聴くほど、私の気持ちはどんどん沈んでしまいました。たとえば、「米寿のお祝いに孫たちがプレゼントをしてくれたのに嬉しいと感じることができない。お下の世話をしてもらってまで生きている甲斐がない」と話す方。また「戦時中すぐ目の前で仲間が溺れて死んでいった。今自分の足腰が立たなくなって、こんなに大変な思いをするならば、あの時死んでいればよかつと思うた」と愚痴をこぼす方。「デイサービスに行くことだけが楽しみで、どうすれば迷惑をかけずに死ぬのか、みんなで話をしている。早くお迎えが来ることを待っている」と言う方。

1日に4件も5件も話を聴くと、相手が愚っていると理解していても、実のところ私は「いい加減にしてくれ、冗談じゃない! 時期が来たらサッサとこの仕事をやめてやる」と心の中で思っていました。また、今の高齢者の後に続く私たちにも、実は高齢期は何の希望も喜びもないのではないだろうか、世間では長生きすることが喜ばしいことになっているけれど、実際には苦しみなのではないだろうか、と思わずにはいられませんでした。

しかし訪問を更に重ねていくと、ご家族やヘルパーさん、隣り近所の方々の介助を受けながら、意欲的に日々の生活を送っている方に出会えるようになってきました。

足腰が弱く買物に行かれない独り暮らしの男性



の方は、新聞広告の余白に今日の献立とヘルパーさんに買って来てもらう品物を忘れないように書き出し、また大学ノートに日付を振って、その日何があったのか、誰に会いどんな話をしたのか記載しています。また90歳代のある男性は、ヘルパーさんの掃除の仕方に不平を言う妻に対して「ヘルパーさんを頼んだ時の気持ちを忘れてはいけない」とたしなめられたのです。

こんなとき、私は、ただただ感激するばかりです。生きることに意欲的であったり、自分をしっかり持って律しながら生きている方に出会うと、私まで元気になったり、叱咤激励されているようで「またここに来たい」そして「もっと話を聴いてみたい」と思います。

さらに、印象的な出会いもありました。夫婦共に65歳以上の2人暮らし(老老世帯)で、その妻が痴呆症となり、夫が介護をするというお宅でした。夫が言います。「私がそれをしてはダメだと強い口調で言ったり、怒った顔をする」と妻も怒って物を投げたりするけれど、私が笑っていれば穏やかにニコニコしているんです」と。介護を受けている妻は、私と会うなり、人なつっこく近づいて来て手を握り「よく来たね、ゆっくりしてって」と満面の笑顔で椅子をすすめてくれました。そして私の隣に座り、調査の大半の時間を、手袋を用い独り遊びをしていました。私はその方の笑顔が忘れられません。

また、別の男性は介護サービスを利用して自宅での介護が困難なため、介護老人福祉施設に移り、生活を送っていました。その方は既に70歳

を越えていましたが、「お年は何歳ですか」と尋ねると「45」と答え、質問と質問の間に「一緒にベッドで寝ようよ」とか、エッチなことばかり言って介護員を困らせていました。私が次に「家に帰りたいと思うことがありますか」と尋ねると「帰りたいねー、子供に会いたいよ」と笑顔で答え、妻や子供たち、その当時同居していた母親の名前を一人一人間違えることなく呼びあげました。話をしているこの方の顔は、明るく生き生きして、目が輝いていました。きっと一番働き盛りであり、大切な家族に囲まれ本当に幸せだった頃の記憶が鮮明に残っているのでしょう。そして今も幸せなんだろうな、と私はその方の表情を見て思いました。

私が残したいもの

私は今回、訪問調査を経験して、80歳や90歳になった自分、なりたいた自分を時々イメージしました。そして、今現在を悔いなく生きることが大切なんだと思い至った次第です。

今の私のなりたいたイメージの一つに「笑顔のおばあちゃん」があります。特に痴呆症の方の笑顔は、本当に無邪気でかわいいのです。私まで、ついつられて笑みがこぼれてしまいます。私はできることなら痴呆症にならずに、こんなチャーミングな笑顔で毎日を過ごすことができればいいな、と思います。赤ちゃんの笑顔は、まわりを幸せにします。おばあちゃんの笑顔もまわりを幸せにすることができると思います、今日この頃です。

今回は佐藤和子さんにバトンを渡します。

(わたなべ・あけみ)